みんなの歓声

朝昼夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
みんなの歓声

【Ｎコード】
Ｎ１１７０Ｎ

【作者名】
朝昼夜

【あらすじ】
その野球選手に対して喝采の嵐。みんなが彼を祝福する。
というのも事故がその拍手を生み出すきっかけとなったのだ。
車とその野球選手の衝突。車は少なくとも４０キロは出ていたのだから、ぶつかれば怪我では済まないレベルだったということは誰でも理解できる。だから、彼が車に吹き飛ばされた時、彼のファンである低血圧の女性は貧血で倒れそうになったがぐっと堪えた。

その野球選手に対して喝采の嵐。みんなが彼を祝福する。
というのも事故がその拍手を生み出すきっかけとなったのだ。
車とその野球選手の衝突。車は少なくとも４０キロは出ていたのだから、ぶつかれば怪我では済まないレベルだったということは誰でも理解できる。だから、彼が車に吹き飛ばされた時、彼のファンである低血圧の女性は貧血で倒れそうになったがぐっと堪えた。
だが面白いことにその野球選手は演舞でもするかのように空中で二転三転と回転し、吹き飛ばされたにも関わらず傷一つなく見事にコンクリの地面へと着地したのである。最後には決めポーズも決めた。さも体操選手であるがごとく立派なポーズだった。
「すげえ」
「ぱない」
「かっこいい」
その野球選手のその奇跡的な動きは誰かがたまたま持っていた携帯で撮影されたということで動画配信された。その結果、その選手は一躍注目されることになる。元々人気者ではあったのだが、さらに人気者ぶりが増したというわけだ。その一連の流れで野球に対する熱も高まり彼の所属する球団に対する注目も増えた。
そうなってくると生々しい話だが、その動画が『嘘』であったのではないかという話も出てくる。今時はそういう動画を作ることは簡単だ。いくらでも嘘はつける。そもそも、事故の時点で携帯で動画撮影をしていたなんて、いくら人の多い都会といえどもそんな偶然があり得るものだろうか。
そういうわけで、事故自体が『嘘』、つまり演出だったのではないか、という噂がひそやかに世間に流れることとなり、やがて野球

に対する熱は冷え、それによってその選手も気まずい感じになってしまったのであった。

ある一人の男が実験を試みようと考えた。その男はあの事故が『嘘』だとは思っていなかった。というのも彼自身がその事故を目撃したのだが、とてもとてもあれが演出というか偽装というか、とにかく作られた偶然だとは思えなかったのである。彼には。それ程に野球選手の動きは軽快だったし素晴らしい代物だったのである。人生ではもう二度と拝めないくらいに。

だからなのかもしれない。もう一度あの動きを見たいのかもしれない、男は。そういうわけで彼は動きに出る。常にその野球選手の動向をチェックし、もっとも隙のある時間帯を見つけ出し、そして彼は車に乗り込んだのである。エンジンを吹かし、「どんな動きをみせてくれるものか」と呟き彼は深呼吸。そしてさらに悪友のことを呼び出し、「この場所にこの時間に携帯で動画撮影をする準備をしていろ。そうすりゃ面白いものが見れるぜ」と語った。そうして彼は車を発進させる。

信号機を潜り抜け、道路を潜り抜け、車体を揺らし、スピードはぐんぐん上がる。風になった彼を止められる男はもう一人しかいない。やがて見える影。男はニヤリと微笑む。

野球選手めがけて車は突進したのである。

くるんくるん。しゅた。

拍手喝采。人々は突然の大きな音に足を止めたものだが、目の前

で生じた光景に自然と拍手は沸いた。一人の男がフロントガラスを割って車から飛び出し、二転三転してコンクリへと両足で着地したというのだから、驚きである。みんなそちらにばかり気をとられ過ぎたというわけで、野球選手が轢かれたことに気が付いた人はわずかである。貧血気味の女性は倒れそうになったが友達に支えられて大丈夫だったが、野球選手は無事ではない。拍手喝采の中、密かに救急車で運ばれていったのであった。

しかし驚きなのは男の運動神経。男自身が驚いてしまっている。

「俺にこんな身体能力があっただなんて驚きだ」

彼は驚愕のあまり目を潤ませ泣き出してしまった。唐突にあり得ないことに出会うと人は涙を零してしまう時があるが、今の男はまさしくその状況であった。

それから彼は有名人になったわけであるが、

「くるくるくるくる回転したい」

という病にかかってしまった。ある人はそれを野球選手の呪いと評したが、事実はわからない、ただ単に頭がいかれてしまったという可能性もある。

さらに彼の周辺には動物たちが集まるようになった。しかもみんな喋るのである。男にしか言葉はわからない。

猫が言う。

「くるくるを見せてくれにゃん。最近どうも退屈でにゃー。なんつうか、ど派手なエンターテイメントってのを見せて欲しいニャン♪」

さらに鳥が言う。

「私も最近暇なんだよねえ。ていうかさ、カラスがうざいんだなあ。最近調子に乗ってんのあいつら、くるくる回転でカラスどもをぎったぎたにしてやってよ」

男は理解に苦しむ。

「くるくる回転で何でカラスがぎったぎたになるのか理解不能なんだが。…まあいいや」

男はさっさとくるくる回転をしたかったので、車に轢かれた。わ

ざと。
　しかしくるくる回転に失敗。カラスたちに笑われながら、コンクリに頭から突き刺さった。
「なんで生きてるんだ、俺…」
　そんなことを呟きながらコンクリから頭を出すと、車から女の人がでてきた。
「だいじょうぶですか！？」
　かなりあたふたしているが、彼はちっとも大丈夫だったので
「平気平気、へっちゃらぽんだぜこんなもんあはははははっは」
　と笑っていた。しかし女の人は心配気だ。
「そうですか。でも検査とか受けた方がいいですって。なんか、頭打ったみたいだし」
　男は
「いいよいいよ、そんなもん」
　と繰り返していたが女の人に心配されることに満更でもないらしく、彼女の車に乗っけてもらって病院に向かった。病院は混んでいたのでなかなか診察を受けることが出来なかったが、三時間後くらいには受けることができた。男と女はその間いろいろ和気藹々としていた。途中病院の中に動物たちがガヤガヤ入ってきては囃し立てたりするのが五月蝿かったが、やっぱり男は満更じゃなかった。老人たちも動物たちと戯れて幸せそうだ。病院は幸せオーラで満ち満ちている。
「頭打っちゃったんですこの人」
　診察室で女の人は先生に言う。
　先生は面白い人で、道化の格好をしている。ちょっと気味が悪かったが、腕は確かという街で評判の医者だ。
「おほほほほほ。頭を打ったってのかい、この人。んじゃ、頭を観察してみっかねえ」
　楽しそうに医者は笑う。診察室は人形ばかりが置かれていて、看護婦さんも綺麗だけど何だか無表情で何考えているのかわからない。

さらに空は何時の間にか鬱屈とした灰色で、遠くで雷が轟いていたりもしている。何時の間にか、なんだか不気味だ。
男は不気味に思いつつもまあ大丈夫だろうと思い、診察台に横になる。女は微笑みながら、「ゆっくり休んでくださいね」と笑いかけてくる。

……診察台に寝かせればあとはこっちのもん

そんな声を遠くで耳にしたその時、男は意識がフェードアウトしていって、消えていった。

目を覚ますと動物たちに担がれていた。
青空の下、動物達が
「わっしょい！　わっしょい」
とか言って楽しんでいる。いつの間に？ビルの窓からたくさんの人がこちらに手を振っている。
「よ、人気者！」
「楽しそうで羨ましいわー！」
「頑張れよー！」
彼らの声援。がやがやしている街。みんなが注目している。
男は嬉しくなりながらも不思議。横を見ると、女。彼女が何故か金属バットを構えている。
男は訳が分からなかったが女に金属バットを手渡された。
「あなた、がんばるのよ！」
訳がわからないと思いながら動物たちに担がれたまま、どこまで

も進んでいく。まるでパレードだ、野球チームの優勝パレードのように街を担がれて闊歩。そしてみんなが俺を応援。となりの女からは金属バット…。
やがて、向こう側に見えてきた。そう、荒野が。
荒地には草木一本ですらも生えていない。乾燥している模様。
そこにいる一人の人間。そこにいたのは野球選手だった。俺が轢いた。
「こっからはあんたが戦うだけだぜ、男前！」
「がんばれよ、遠くから声援だけは送っているからさ」
「あんたは金属バット。向こうは超特大核弾頭ボールよ」
カラスや鳥やイルカが俺に語る。とんでもない話である、超特大核弾頭ボールだと？
「そうだ。俺の投球は最大球速１６０キロは出る。それを一撃で金属バットで打ち返さなければ、街は滅びる。核弾頭パワーによってね。だけどお前が打ち返せば、みんなこれからも平和に生きていける。それが駄目なら、動物たちごと丸めてゴミ箱へポンだ。せいぜい、頑張るんだな」
野球選手は血走った眼。彼は、嫉妬している。俺に憎悪を撒き散らしている。人気を奪ったから、なのか、何が関係しているんだ、病院で診察を受けたことと関係しているのか？
訳の分からないままに空を見ると、ピエロの顔がそこにあった。道化の顔。そうだ、あの医者だ。
「お前が真犯人なのか？　このふざけた遊びの」
俺が叫ぶと道化の医者は、灰色の空から微笑んで、しかしそれきりなにも言わない。
そうこうしている内に野球選手が荒野で、投球の準備。
「これで打てればお前の勝ち。打てなければお前の負け。それだけだ。さあ、いくぞ」
みんなが男に声援を送る。動物たちが、人間たちが、がんばれという声援を逞しく送ってくれる。女の人だって「これで打ったら結

婚よー」とかなんか言ってる。動物たちは「おい、お前打たないとまじ俺死ぬかんな」とか脅してくるし、背後の人間たちは「あんな野球選手俺嫌いだから負かしてくれよなマジで」とか言っちゃってる。みんなそれぞれ事情があるらしいが、それが俺の金属バットの一振りいかかっているというのだ。

俺は息を呑む。荒野の野球選手が、振りかぶる。そして、投げた。

そして、俺は。

見事な超特大ホームランによって超特大核弾頭ボールは荒野に打ち返され、それが野球選手に直撃。彼は玉砕され、どこまでも遥か彼方へと吹き飛んでいった。そして、消え去る。

俺は息を吐きながら、みんなの声援を聞く。

「やったー！」「よっしゃー」

わーわーわーわーわーわーわーという声々全てが混ざりあって街中パニックに。

世界は救われたのだ。空のピエロの微笑みももう消えている。野球選手もいなくなった。

こうして、世界は救われたのだった。

女が駆け寄って来て嬉しさのあまりか飛びつく。彼女もテンションが上がってる。

「やったわー！　私たち、結婚しましょう！」

「そうだな！」

みんなが囃し立てる中二人はいちゃついてみせつける。

「ヒューヒュー！」

「うらやましいねえ！」

「ヒューヒューヒュー！」

「ヒューヒューヒューヒュー！」

鳥たちがお祝いだと言うのか、空に向かって白い羽を羽ばたかせ

盛り上げる。
純白の羽が街中に降り注ぐ。みんなが騒ぎながら踊りまわる。
こうして彼らは幸せになったのでしたっ！
ちゃんちゃん！

（後書き）

これにてしばらく短編を書くのは控えようと思います。
うん、長編を完結させなくては！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1170n/

みんなの歓声

2010年10月8日14時43分発行